

織田作之助作品にみる デス・マス等の転訛形の位相差について —「わが町」の世界—

村中 淑子

1. はじめに

織田作之助の小説作品に出てくる大阪の言葉については定評があるといっていよう。大阪出身の先輩作家で自身も大阪の言葉を用いて小説を書いた宇野浩二が「私は、織田の作品を読んだとき、一ばん、感心したのは、大阪の言葉であつた。」と述べている¹⁾。

本稿では、織田作之助(1913-1947)の長編小説「わが町」の登場人物の言葉が20世紀前半の大阪の言葉²⁾の実態を表すものと想定し、「デス・マス等の転訛形」の位相差に注目して分析する。

2. デス・マス等の転訛形について

2.1 形態的特徴と語感

「デス・マス等の転訛形」とは、丁寧の助動詞であるデス・マス等³⁾に助動詞や助詞が後続したものの上に、音声転訛が生じた形である。「そうデンガナ」「そうデンネン」「行きマッシャロ」「行きマヘン」等のカタカナ部分がそれである。これらを「音声転訛形を含む文節<転訛する前の形(標準語訳)」で示すと次のようになる。転訛する拍に下線を付した。

- ・そうデンガナ<そうデスガナ(そうですよ)
- ・そうデンネン<そうデスネン(そうですのだ、そうなんですよ)

・行きマッシャロ<行きマスヤロ(行きますでしょう)

・行きマヘン<行きマセン(行きません)
これらは、次の3つの形態的特徴の、いずれかを持つものと言える。

①ス語尾の促音化(例: ますやろ→まっしゃろ)、②ス語尾の撥音化(例: ですねん→でんねん)、③否定形もしくは意志形のサ行子音の摩擦弱化(例: ません→まへん、ましょう→まひよ)。

2006~2008年実施の関西におけるインタビュー調査(村中2009)の回答によると、これらの語形は「大阪弁の強烈バージョンである」「ベタなししゃべり方の人に合わせて使う」「仕事上の必要性からあえてコテコテにしゃべるときに使う」という。強烈バージョン・ベタ・コテコテという形容から、これらの語形が大阪方言らしさの印象を共通に持つのではないかと考えられる。そこで、これらの語形を分析対象とすることにした⁴⁾。

(デンガナ・デンネン・マッシャロ・マヘン以外の語形については注6を参照。)

2.2 先行研究における記述

「デス・マス等の転訛形」は、関西方言の概説書や辞書などにおいて、音声的特徴あるいは文法的特徴の1つとしてほぼ必ず挙げられていた。榎垣(1946)、前田(1949)、榎垣(1962)、奥村(1962)、牧村

(1979)、等がそうである。そしてこれらの記述には、年代差や性差や職業差などについての言及が無い。

ところが、山本(1966)ではこれらについて「女子学生にあっては、ほとんど用いられない」とし、金沢(1987)ではそれらの表現が若者にとっては笑いの対象となるような古くさい印象のものであるとし、郡(1997)は「こういう言い方は高年層のもの」としている。

以上の先行研究から、大阪方言における「デス・マス等の転訛形」は、20世紀の後半においては、①「古い」印象を持ち、②中高年層話者に偏って使われる傾向を持ち、③男性に偏って使われる傾向を持つ、とみられる。

しかし、20世紀前半はどうであったか。これらの語形の存在は明らかだと言えそうだが、使用する話者に偏りがあったかどうかは明らかでない。1953年に大阪市の話者(当時65歳の男性と55歳の女性)から採集された談話資料『NHK全国方言資料』にはこれらの語形が数多く出現していることから、20世紀半ばごろの大阪市の中高年層話者は男女問わず使用していた可能性がある。しかし若年層や個人差の実態は不明である。

以上述べた通り、大阪方言らしさに関わりの深そうな語形群である「デス・マス等の転訛形」について、20世紀前半の位相差が明らかでない。そこで本稿では、20世紀前半の大阪の言葉について、次の仮説を手掛かりとして調べることにする。

- | |
|-----------------------------------|
| (1) 話者の年齢層が高いほど「デス・マス等の転訛形」をよく使う。 |
| (2) 男性の話者の方が「デス・マス等の転訛形」をよく使う。 |

3. 織田作之助と「わが町」について

20世紀前半当時の大阪の実際の人物の話し言葉を生の形で残している資料がほとんどないと考えられるため、位相差を知るには小説を用いるのが一つの適当な手段だと考えられる。

小説全般における「デス・マス等の転訛形」の使用度数を概観するために、「青空文庫パッケージ」⁵⁾を用いて、「デス・マス等の転訛形」の20語形⁶⁾を検索した。

結果は次のようであった。延べ件数は1785件。使用していた作家は78名で、作家別使用度数の順位は、1位織田作之助374件、2位水上瀧太郎243件、3位上司小剣174件。当該語形を多く用いる作家の作品を調べることが当該語形の表現上の位置付けを考える上で役立つとすれば、織田作之助の作品を調べることは適切だと思われる。生没年は1913年と1947年であり、20世紀前半という条件に当てはまる。短編よりも長編の方が人物一人当たりのセリフが多いことが期待され、人物ごとの傾向を見るのに都合がよいと考えて、長編小説「わが町」を選んだ。

「わが町」は頑固で愚直な働き者の男、佐渡島他吉と周辺の人々を描いた長編小説であり、織田作之助の生育地である大阪中心部のミナミ近辺に設定された架空の町「河童路地」^{がたろ}境界が舞台で、大阪の下町の生活実態をよく反映していると考えられる。「わが町」には織田作之助の既発表作品「夫婦善哉」や「婚期はずれ」の人物やエピソードが一部はめ込まれているが、それらは「わが町」独自の人物と渾然一体となり、全体が河童路地に生きる人々の大きな物語となっている。

4. 調査方法

前述の「青空文庫パッケージ」には、織田作之助の65作品が収められていたが、「わが町」は入っていなかった。そこで青空文庫の「わが町」本文をダウンロードし、全てのセリフをエクセルでデータベース化し、集計した。青空文庫には「わが町」が長短の2種類入っているが、本稿でデータとしたのは、初出形の短編ではなく長い方の作品である⁷⁾。1組のカギカッコに括れたものを1つのセリフとして数えた。すなわち1つのセリフは必ずしも1文ではない。⁸⁾⁹⁾

5. 結果と考察

5.1 主な人物のセリフ数と「デスマス率」および「転訛率」

「わが町」の登場人物は50人を超える。セリフの多い順に10人とその他をまとめて表1に載せた。セリフ数はこの10人で全体の8割以上を占める。

年代は中高年層と若年層と子供時代に三分し、20代・30代と思われる人物を若年層とした。物語の2章と3章の間に10年が経過しており、君枝と次郎は2章までは子供であることから、この2人は子供時代とそれ以降で分けた。

(A)は全てのセリフの数、(B)は(A)のうちデス・マス等の含まれたセリフの数、(C)は(B)のうちデス・マス等の転訛形が含まれたセリフの数を示す。

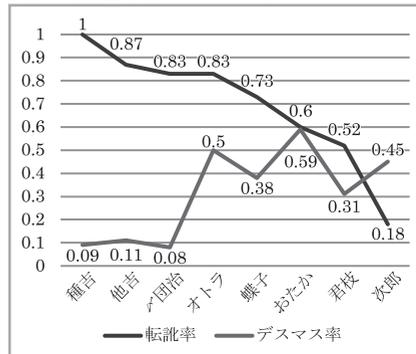
主人公の他吉のセリフが最も多い。次に多いのが他吉の孫娘の君枝、その次が君枝と結婚する次郎である。メ団治は他吉の隣人、蝶子は近所の天ぷら屋の娘で「夫婦善哉」の主人公、種吉は蝶子の父で

表1 人物ごとのセリフの数

人物名	年代/性別	セリフ(A)	デスマスありのセリフ(B)	デスマス転訛ありのセリフ(C)
他吉	中高/男	216	23	20
君枝オ	若/女	134	42	22
次郎オ	若/男	74	33	6
メ団治	中高/男	78	6	5
君枝コ	子供/女	40	1	0
蝶子	若/女	29	11	8
種吉	中高/男	22	2	2
おたか	中高/女	17	10	6
元子	若/女	15	1	0
主任	中高/男	12	0	0
オトラ	中高/女	12	6	5
次郎コ	子供/男	7	0	0
その他	----	157	35	26
計		813	170	100

(オは大人、コは子供)

図1 転訛率とデスマス率



ある。おたかは近所の理髪店の女主人、元子は君枝の同僚、主任は君枝の会社の上司、オトラは他吉と縁談のあった近所の三味線弾きである。

表1の(B)÷(A)、すなわちデスマス等を含むセリフの割合を「デスマス率」とし、(C)÷(B)、すなわちデスマス等の転訛形として出現する割合を「転訛率」として、転訛率とデスマス率をグラフ化したのが図1である。数値は小数点第3位以下を四捨五入した。図1では転訛形

の出ない人物(主任、元子、子供時代の君枝、子供時代の次郎)は省き、8名の話者を左から転訛率の高い順に並べた。

5.2 デスマス率と転訛率から見る位相差

5.2.1 中高音男性の場合

図1を見ると、まず、特徴がまとまっているのが中高音男性の3人(他吉、メ団治、種吉)である。この3人はデスマス率が低く、いずれもセリフの約1割にしかデス・マス等が現れない。しかし転訛率は高く、デス・マス等が現れた場合は、その8割以上が転訛形なのである。

中高音男性の人物の例外として表1の主任は、転訛率もデスマス率もゼロである。主任が例外的なのは、主任だけが会社勤めであることと関係するかもしれない。他吉、メ団治、種吉の3人は、それぞれ車引き、落語家、天ぷら屋という客商売を営んでおり、会社勤めではない¹⁰⁾。

他吉のセリフを詳しく見てみよう¹¹⁾。他吉は、家族、近所の人、知らない人、いずれに対しても基本的にはデス・マス等を使わない。ただし車引きの客に対しては「泣いてまんねん」「ころっと逝きよりましてな」のようなデス・マス等を使う。車引きの客は初対面の相手であり、客商売としての礼儀上の必要性もあることから、使用するのだと考えられる。

ところが、近所の理髪店の若主人である敬吉に、次のように話すところがある。(1)「敬さん。また無心や」「さいな。今日は剃刀とちがう。あんたの学を貸してほしいねん」「これをひとつ読んでほしいねん」(2)「どうせ婿の新太郎から来た手紙や思いまっけど、なんぞ言うとりまっか。マニラは暑うてどんならん言うとりまっか」

この(1)(2)は同じ場面で連続的に出てくるセリフである。近所をよく知ったもの同士であり、50歳近い他吉が、この頃30歳を少し過ぎたぐらいの敬吉に対する言葉遣いである。年齢的にも、職業的・社会階級的にも、敬吉が他吉より上ということではなく、他吉から敬吉に敬語を使う必要はなさそうだ。ただ、字の読めない他吉が、物知りの敬吉に手紙を読んでもくれと頼む場面なので、(1)のようなデスマス無しの形を使いつつも、(2)のように部分的に少しだけ丁寧な文体になったものかと思われる。

他吉はこのように、敬吉に対してはデスマス無しとデスマス転訛形とが混じった話し方をしているが、相手によっては、全面的にデスマスで話すことがある。「界隈の金満家の笹原」と話す場面である。

(3)「いえ、そんなもんおまへん」「ほんまだっかいな」「旦那さん、えらい変骨言うようでっけど、わたいは孫を酒にかえる気イはおまへん。眼に入れても痛いことのない孫でっけど、酒に代えて口の中へ入れたら舌が火傷してしまいま」「そら判ってます。よう判ってま」「——しかし、旦那さん、たとえ貧乏でも、狸や河童の巣みたいな路地で育てても、やっぱり血をわけたわいに育ててもろた方が、この子の倅せだす。いやきつとわたいが倅せにしてやりま」

この場面は笹原が他吉の孫の君枝を引き取ろうと申し出て、他吉がそれを断る場面である。他吉のセリフの文末は全てデス・マス等である。社会的にやや上であると思われる相手からの好意による申し出を断るという、緊張感の漂う場面である。ふだんはやや粗暴な他吉¹²⁾も、相

当に気を遣って話しているのであろう。

この笹原の他に、他吉が全面的にデスマスで話している相手としては、娘の初枝の縁談の相手である新太郎が職人として働いている桶屋の主人、および、孫娘の君枝の相手である次郎が潜水夫として働いている鶴富組の主人、が挙げられる。いずれも他吉が娘や孫娘の結婚話をまとめるために相手方と相談する場面である。鶴富屋の主人へのセリフをあげる。(4)「いや、その心配は要りまへん。わたしもこう見えても、もとは比律賓のベンゲットで働いて来た人間だす。婿をマニラで死なしても居ります。その点は、よう君枝に仕込んでありまっさかい」

転訛していない形(ダスやマス)と転訛形を織り交ぜながら、デス・マス等で話している。身内の結婚話をまとめるという、他吉にとって気持ちを引き締めてかからなければならない、改まった話題・場面だからだろう。

他吉以外の中年男性、すなわちメ団治と種吉はどうか。やはりいずれも基本的にはデス・マス等を使わない話し方である。種吉とメ団治はともに、他吉と異なり、忍耐強く穏やかな人柄である。つまり、デスマス率が低いのは、話し手の気短さやガラの悪さを示すものではなく、会社勤めではない大阪の下町の中年男性の特徴、とみてよいのではないか。では、彼らがデスマス転訛形をつかう場面はどのようなものか。

メ団治が転訛形を連続して使う場면을挙げる。蝶子の夫柳吉へのことばである。(5)「なんや、維康さんかいな。えらいとこで会うたな」「——この頃どないしたはりまんねん?」「さよか、そら宜しおま

んな。蝶子はんも喜びはりまっしやろ、あんたが働く気になって……。どないだ? 餅ひとつ」「よろしおま。ちとまたどうぞ路地へも遊びに来とくなはれ。蝶子はんによるしゅう」

メ団治から見ると、柳吉は顔なじみかつ年下ではあるが、もともとは大店の息子であり、同じ路地育ちの仲間と比べると少し気のおける相手かと思われる。最初のセリフのようなデスマス無しの形に、デスマス転訛の文を混ぜて話している。

種吉がデスマス転訛形を用いているのは次の2つのセリフである。

(6) 朝日軒の敬吉が出て来て、「種さん、おまはんもこいで一安心やな」と、言う、「さいな。売れてくれると宜しおまっけど、さて開いて見たら、耳かきぐらいしか売れへんのとちがいまっか」種吉はちょっと照れた。

(7)「柳吉つあんの口添えだんねん」と、得意そうに種吉は君枝に語った。

いずれも話し相手はかなり年下で((6)は敬吉、(7)は君枝)、(6)は照れ、(7)は得意げ、という気持ちが込められている。プラスの気持ちを遠回りに表現する際にデスマス転訛を使っているようである。

5.2.2 中年女性の場合

中年女性のおたか、オトラは、デスマス率が登場人物の中で最も高い2人であり、かつ、転訛率もかなり高く、60%と83%である。おたかの例をみよう。

(8) (娘に縁談を持ってきた相手に向かい)「格式が違うことあれしめへんか」

(9) (自分の息子に)「この歳になって、^{ひと}人様^{さん}に頭下げるのは、いやだっせ」

これらのセリフにも現れているよう

におたかは虚栄心が強く高慢なところがあつたが、その後家庭状況が変わって明るくなり、久しぶりに出会った君枝(20歳過ぎ)に次のように気さくに話しかける。

(10)「いつもこの通りでんねん。今日かて、あんた、この子の虫封じのお守り貰いに来るのに、一家総出の大騒ぎでんねん」

デスマス転訛は、おたかにとっては身についた言葉遣いであり、相手との親しさや状況に関わらず使う傾向があるとみてよいだろう。オトラも同様である。

5.2.3 若年層女性の場合

若年層について、まず女性の君枝と蝶子をみる。この2人は、デスマス率も転訛率もそこそこの高さである。

君枝は、子供時代は誰に対してもデスマス等をほぼ使っていなかったが(下足番をしていた時の「おいでやす」のみ)、20歳以降は、仕事の際にも、幼馴染の次郎に対しても、デスマス等を使っている。詳しく見ると、上司には転訛形を使い、仕事先では転訛しないデスマス類を使い、次郎にはデスマス転訛とデスマス無しの形を混ぜて使う。次のようである。

(11) (上司に)「あそこは五日ほど前廻ったばっかしでっけど……」「卓上(電話)でも引きはったんでっしゃろか」

(12) (仕事先で)「ほな、お邪魔します」「近所の風呂屋で下足番してました」「お祖父さんと二人です」「伸ひきしてます」「玉造で桶屋してましたけど、失敗してマニラへ行って、死にました」

(13) (次郎に)「そうでんなあ」「ええもんや言うことは聴いてまっけど……」「そうオ? いったい、なんやの?」「朝日軒の椅子みたいやわ」

次郎に対しては、結婚前も結婚後も同様に、デスマスありとデスマス無しの形を織り交ぜて使っている。

一方、同僚元子、祖父他吉、隣人メ団治に対しては、次のように、デスマス等の全くない形で話している。

(14) (元子に)「——どんな人か知らん。うちなんにも考えてへんかったもの」「ちっともええことあれへんわ」「うち、お嫁入りみたいなものせえへん」

(15) (他吉に)「そんなこと言うたかて、歳は歳や。羅宇しかえ屋のおっさんかて、こないだ流してる最中にひっくりかえりはったやないか。お祖父やんにもしものことあったら、どないすんのん?」

(16) (メ団治に)「メさん、あんたアンドロメダ星座いうのん知ったはる?」「阿呆やな。洋食とちがう、星の名や」

つまり大人になった君枝は、相手によって様々にスタイルを切り替えている。

もう1人の若年層女性の蝶子も、夫の柳吉に対しては、デスマス転訛とデスマス無しの形を用いる。次のようである。

(17)「あんたはそれで良うても、わてがあんたのお父さんに笑われま。二人で、苦勞してこれだけの人間になりました言うて、お父さんの前へ早よ出られるようにしよ思て、一所懸命になつてるわての気持は、あんたには判れしめへんのんか。いつになったら、真面目な人間になつてくれまねん」「散財さえしてくれんなら、わてだけの力であんたを養生させられた筈や」

蝶子は君枝に対しては、次のように、ほぼデスマス無しの形なのであるが、マヘンだけは使っている。

(18)「あんた、ぼやぼやしてたら、あかん

しイ」「何やのて、ほんまに、えらいこっ
ちゃ。あんたとこの人が、昨夜うちの店
へ来て、散財しやはってん」「ここを、君
ちゃん、よう噛み分けて考えなああきま
へんぜ」

マヘンは、デスマス転訛形の中でも出
現しやすい形なのかもしれない¹³⁾。

5.2.4 若年層男性の場合

若年層男性の次郎は、少年時代は誰に
対してもデスマスのない形を使っていた。
祖父ほどに年長の他吉に対しても次
のように「他あやん」「おっさんら」と呼ん
だり、ズケズケ言ったりして遠慮がない。
(19)「他あやん、もっとほかの話してん
か。ベンゲットの話ばっかしや。」「おっ
さんら新聞見ても、新聞やのうて珍ぶん
漢ぶんやろ？」

しかし、20歳ごろ東京へ奉公に出て、
30前ごろ大阪へ戻った次郎は、デスマス
を使う。10年ぶりに会った君枝に対し、
(20)のように、大阪弁と東京弁が混ざり、
かつ、デスマスありとなしが混ざり、
転訛ありとなしが混ざる。

(20)「やっぱり君ちゃんやった。いや、な
に、この写真を見たはるんでね、そうじゃ
ないかと思ったんや」「メさんに連れら
れて、この写真いっしょに見たのは、あ
れはもう十年も前でんなあ。」「早い方が
良いでしよ。明日までに引伸してあげ
ますよ。夕方渡してあげます。」「そんな
ら、五時半頃来られまっしやろ？」

しかし、結婚後は、次のように、君枝に
対してデスマスは全く使っていない。

(21)「お前にも苦労させるなあ。済まん
なあ」「君枝ももちろん一しょに行くやろ」

次郎は、他吉に対しては、君枝と結婚

した後、基本は(22)のように転訛ありだ
が、怒ると(23)のように転訛無しのデス
マスになっている。

(22)「それなら、今夜はまあ、気を利かせ
て貰うことにして、明日からずっとこの
家へ来てもらいまっせ。」「何言うたはり
まんねん。そらお祖父やんがマニラへ行
きたい気イはわかるけど、その歳でひと
りマニラまで行けるもんですか？」

(23)「——どうせ僕は甲斐性なしです。
気に入らんかったら、君枝を連れて帰っ
てもらいましよ」

また、仕事の上司に対しては次のよう
に転訛形なしのデスマスで話す。

(24)「いや、女房だけじゃ良いんですが、
祖父さんのことを考えると、うっかり
……。そりゃ、あの祖父さんのことです
から、僕が死んでも立派にやって行って
くれるでしよけど、しかし、あの祖父
さんもこれまでに一度婿を死なしていま
すから……」

つまり次郎も、相手や状況による何通
りかの使いわけがある。

5.3 どんな転訛形をだれが使うか

次の表2では、図1に示した8人の人
物が、デス・マス等の転訛形としてどん
な語形を用いているかを示した。上半分
が男性、下半分が女性で、それぞれの中
で年代が高い人物を上の方に配した。使
用度数は問題にせず、使うか否かのみ
に注目し、使っている場合に●をつけた。

表2を、左からダスの転訛形(ダッカ
からダンネンまで)、デスの転訛形(デッ
カからデンネンまで)、マスの転訛形
(マッカからマンノンまで)、その他、の4
グループにまとめて観察すると、どのダ

ループにも中高年・若年と男性・女性が混じっている。使用者の年代あるいは性別の偏る語形グループはない¹⁴⁾。

個人別に見ると、転訛形を含むセリフ数が少ない話者も、使う転訛形のバラエティはそれなりの数がある。転訛形を含むセリフ数が多いのは、セリフ数自体が多い他吉と君枝であるが、他吉は12種類、君枝は13種類のデス・マス等転訛形を用いている。つまり使用するデス・マス等の転訛形のバラエティの豊かさは、

年代・性別に関わらないとみてよいだろう。年齢が高いほど、あるいは女性よりも男性のほうが、多様な転訛形を使うというわけではなさそうだ。

マヘンは9人中8人が使用。マヘンは相手への働きかけや話し手の気持ちを表す部分に関わりがなく、つまり人間関係の文脈に関わりがなく、丁寧体の場合の動詞の否定形に関わるだけであるため、他の語形よりも出現頻度が高かったのである。

表2 各人物の使用したデス・マス等の転訛形¹⁵⁾

	ダ ッ カ	ダ ッ サ カ イ	ダ ッ セ ン	デ ッ カ ネ	デ ッ サ カ イ	デ ッ ケ ド	デ ッ シ ヤ ロ	デ ッ セ	デ ン ナ	デ ン ネ ン	マ ッ カ	マ ッ ケ ド	マ ッ サ カ イ	マ ッ シ ヤ ロ	マ ッ セ	マ ヒ ヨ	マ ヘ ン	メ ヘ ン	マ ン ナ	マ ン ネ ン	マ ン ノ ン	マ ン ン	ヤ ッ シ ヤ	ダ マ	マ	転訛形を含むセリフ数	
他吉	●	●				●					●	●	●	●	●		●				●			●	●	20	
メ団治						●								●			●			●	●	●			●	●	5
種吉				●							●	●														2	
次郎									●					●	●						●					6	
おたか			●						●		●						●	●								6	
オトラ				●													●								●	5	
蝶子			●									●					●	●	●		●			●	●	8	
君枝					●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●				●	●	22	

6. まとめ

2つの仮説「(1) 話者の年齢層が高いほど「デス・マス等の転訛形」をよく使う。(2) 男性の話者の方が「デス・マス等の転訛形」をよく使う。」を立て、小説「わが町」のセリフを20世紀前半の大阪の言葉の実態を表すものとして分析したが、見てきた通り、「わが町」においてはこの2つの仮説はいずれも成り立たない。2つの仮説が前提としているような単純な仕組みではなく、次のようであった。

a. 「デス・マス等の転訛形」の使用したいは、年代・性別に関わらず見られ、使用

するデス・マス等の転訛形の種類の豊かさも、年代・性別に関わらない。

b. 中高年男性は、デスマスの使用率が極めて低いが、使用する場合はほとんどが転訛形である。改まりや遠慮の気持ちや照れ隠しなどが使用の要因である。

c. 中高年女性は、デスマス使用率が高く、転訛率も高い。転訛形は身についたもので、家族に対しても使っている。

d. 若年層女性はデスマス率も転訛率も共に比較的高めである。

e. 子供時代は、定型的な挨拶言葉を別とすれば、男女ともにデスマスを使わない。

f. デスマス無しスタイル、デスマス転訛形のスタイル、転訛しないデスマス形のスタイル、の使い分けの様子は、人物によって異なっていた。

参考文献

- 榎垣実(1946)『京言葉』高桐書院
榎垣実(1962)「近畿方言総説」『近畿方言の総合的研究』三省堂
奥村三雄(1962)「京都府方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂
金沢裕之(1987)「落語の上方弁と漫才の上方弁」『国文学解釈と鑑賞』52-7: 106-113
郡史郎(1997)「大阪方言の特色」『大阪府のことば』明治書院
田辺聖子(1973)「言い寄る」文藝春秋社
日本放送協会編(1981)『全国方言資料』日本放送出版協会
前田勇(1949)『大阪弁の研究』朝日新聞社
牧村史陽(1979)『大阪ことば事典』講談社
村中淑子(2009)「関西方言および女性語」『加齢による社会活動の変化にともなう言語使用の変化に関する研究 平成18～20年度科学研究費補助金(萌芽研究) 研究成果報告書 研究代表者 尾崎喜光』: 5-17
村中淑子(2017)「関西方言におけるデスマス体の転訛形についての試論 —『NHK全国方言資料』を用いて—」『現象と秩序』6: 1-30.
山本俊治(1962)「大阪府方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂
山本俊治(1966)「女子学生の方言意識とその実態(3) —大阪方言を素材として

—」『武庫川女子大学紀要人文科学篇』13(『日本列島方言叢書16近畿方言考4(大阪府・奈良県)』ゆまに書房1996所収)

調査資料

「青空文庫」所収 織田作之助「わが町」(底本: 織田作之助名作選集9 出版社: 現代社 初版発行日: 1956年10月31日)

使用サイト

『青空文庫』パッケージ(国立国語研究所 山口昌也氏作成)、全文検索システム『ひまわり』

注

- 1) 「夕刊新大阪」(昭和25年5月9日刊)1面の宇野浩二執筆コラムから引用。
- 2) 大阪の言葉、すなわち大阪の方言については、山本(1962)で「全国まれにみる人口の稠密、交通の発達、求心的な産業形態等は、必然的に府下各地の言語差を平均せしめ」「大局的にはさして異ったもの言いは聞かれない」とある。本稿では、大阪市内中心部のことばが大阪府の方言の中核部分をなすと考え、それを「大阪の言葉」あるいは「大阪方言」と呼ぶ。
- 3) デス・マス「等」と呼ぶのは、丁寧の助動詞の方言形ダス・ドス・ヤスをも含めて考えたいからである。
- 4) 本稿ではデス・マス等の転訛形を一括して扱っている。実際には、語形ごとに性質が異なり、使用者が異なりうるが、まずは一括して扱い、その後、個別に見ていくというやり方をとりたい。
- 5) 「青空文庫パッケージ」とは『青空文庫』の作品を全文検索システム『ひま

- わり』用にインポートしたデータで、国立国語研究所の山口昌也氏によって作成された。本稿における検索結果は、2016年4月6日公開版の『青空文庫』パッケージ (20160401) を使用したもので、12824作品を対象としている。
- 6) 20語形の内訳を検索件数の多い順に示すと、マヘン805、マッセ159、ダッカ90、ダッセ86、マヒヨ85、ドッセ81、マッシュャロ80、マンネン66、マッカ57、デッシュャロ42、マンナ42、マンガナ40、ダッシュャロ38、デッセ32、デッカ31、デンナ15、ドッシュャロ14、ドッカ10、デンネン10、デンガナ2。
 - 7) 青空文庫所収の2種類の「わが町」の底本は『俗泉 織田作之助[初出]作品集』(インパクト出版会2011)と『織田作之助名作選集9』(現代社1956)である。前者の初出の方は後者の3分の1以下の短編で、人物やエピソードが少ない。岩波文庫版が後者とほぼ同じということもあり、後者を選んだ。
 - 8) たとえば他吉のセリフで「どないも、こないも、あんた、おまはんやわいの知らん間にあいつらもうちゃんと好いた同志になつたりまんねんぜ。阿呆らしい。ほんまに、こんな、じゃらじゃらした話おまっかいな」は3つの文を含むが、1つのカギカッコでくくられているので1つのセリフとして数えた。
 - 9) 一見セリフのように見えてもカギカッコで括られていないものは扱わない。カギカッコに括られていれば、独り言らしいものも回想の中のセリフも含めた。ただし、カギカッコで括られていても、明らかに歌の歌詞として出てきた場合は扱わない。
 - 10) 田辺聖子が小説「言い寄る」の中で、登場人物の言動と関連して「大阪では、ツトメ人とショウバイ人とは別の人種」と述べている。本稿筆者も大阪の会社勤めの人物とそうでない人物では言葉づかいが少し異なると考えているが詳しい考察は別の機会に譲りたい。
 - 11) 例文において、デス・マス等の非転訛形に点線、転訛形に実線を付した。
 - 12) 他吉は、気に入らない相手を殴りつけたり「わいはベンゲットの他あやんや」とすごんだりする暴れ者である。
 - 13) 日本放送協会編(1981)の大阪市資料では、デスマス転訛形のうち「ス語尾の促音化」「ス語尾の撥音化」は約5割、「サ行子音の摩擦弱化」タイプ(マヘンの類)は約8割の転訛率があった。
 - 14) 各語形ごとの位相差の傾向も見べきだが、今回のデータでは量が少ないため、偶然性が高く、判断が難しい。
 - 15) マッカイナは「マッカ」、ダッカイナは「ダッカ」に含めた。「ダ」「マ」はダス・マスのスが脱落した形。「デンナ」「マンナ」には末尾の長音化したものも含めた。メヘンは(8)の「あれしめへんか」や(17)の「判れしめへんのんか」のようにシの後に出現する形。シマセン>シマヘン>シメヘンと転訛する。メヘンはこのデータでは女性のみに出現したが、君枝とおたかが「あれしまへん」「あれしめへん」の両方を同様の文脈で使用することから、マヘンとのニュアンスの違いはほぼないと思われる。

付記

丁寧にご査読しご助言下さった先生方に深く感謝いたします。(桃山学院大学)